

懐かしい未来新聞

プラットフォームKoka

雪の中、心温まる色とりどりの対話



令和8年2月8日（日）にまちづくり活動センター「まるーむ」にて、3回目となる「地域共生フォーラム・プラットフォームKoka」を開催しました。生きづらさを抱えたままでも大丈夫だと思える地域をめざし、ひきこもりの家族支援をテーマとした講演会のほか、会場では多様な対話が生まれるブースを多く用意しました。屋外は雪景色で寒い日となりましたが、子どもから大人まで、およそ200名の来場者で会場はにぎわいました。

夏の若者講座の仲間も活躍

発行：甲賀市
地域共生社会推進課
連絡先 内線1350
0748-69-2155

本号の内容
・プラットフォームKoka
・重層事業庁内連携会議
・重層物語ソーシヤル・ピットフォーラム

講演会では、KHJ全国ひきこもり家族会連合会の池上正樹氏（ジャーナリスト）より「ひきこもりの家族支援」と題して、家族が孤立しない形について講演いただきました。池上氏は、ひきこもり状態にある当事者本人を「生き延びるための行為」と受け止め、家族の罪悪感の悪循環を断つコミュニケーション（例えば、本人を肯定的に受け止める「そうだね。すごいね」、感謝の言語化「ありがとう」）を提示されました。また、支援者に対しても、先回り介入の抑制、押し付けられない姿勢、できることへの注目を喚起し、「失敗する権利」を尊重したなかで、安全な空気でエネルギーを充電できる環境づくりを強調されました。また、参加者は会場全体を使用し、おむすびや珈琲、レモネードなどを片手に、ゲームやスポーツ、音楽など、思い思いの参加により、空間を楽しまれました。

会話やコミュニケーションが苦手な人も「ここに居るだけでいい」と思えるような空間づくりや、会場に来場することが難しい人でも作品を展示するという形で参加していたことができました。

来場者からは、「ウェルカムな雰囲気良かった」「静と動の場所があり良かった」「若者スタッフが頼もしかった」等の声があり、イベントを通じて、多様な対話や参加の形が広がり、新たなつながりを生み出すプラットフォームになりました。

実践報告：甲賀ナイスローカルカンパニー

柿泥棒プロジェクト

牧里毎治氏の基調講演の中の話題提供として、地域資源を活用し、好循環を生み出す団体「甲賀ナイス・ローカルカンパニー」の「柿泥棒プロジェクト」が紹介されました。

公共の立場からの発想とは程遠い「泥棒する」という行為が、結果として「無関心層への働きかけ」「里山保全」「福祉連携」「贈与経済循環」といった地域づくりにつながる可能性を持つことについて、活動実践報告が行われました。公と私の境界の難しさを抱えながらも、行政とは異なるアプローチを楽しむ姿が印象的でした。



※「柿泥棒」は企画名であり、地域の方々の了解を得て、実施しています。

1月15日（木）に第2回重層事業庁内連携会議を開催しました。今回の会議は、庁内連携メンバーに加え、市内社会福祉法人の職員ら、計30名が参加し、共に学びを深めました。

「地域づくりに必要な公共の力と働きかけ」というテーマで、関西学院大学名誉教授の牧里毎治氏にご講演をいただき、行政の「公」、社協の

参加者からは、「どんな人にも何らかの関心事があるはず。その人が一番大切にしているものへ働きかけることが、公共力の第一歩」といった感想が聞かれました。

「共」を合わせた公共の力で、地域づくりに無関心な層（市民）へどうやってアプローチしていくのかを皆で考えました。

「無関心な層」と言っても、こちらが勝手に決めつけているところもあり、「感情」「行動」「思考」の3つの生活様式に照らし合わせて丁寧に向き合うことで、働かせる糸口がきっと見つかるというお話でした。



▲関西学院大学 名誉教授
まさと つねじ
牧里 毎治 氏
講演されている様子

地域福祉の巨匠から学ぶ

地域共生社会のさらなる展開に向けて

第2回 重層事業庁内連携会議

※懐かしい未来とは、これまで古い価値観として捨ててきたものの中に、実はこれからの暮らしに必要な大切なものがあつたのではないかと気がつきから使われはじめた言葉です。

重層物語 ソーシャル・ピットフォール

あの大きな穴は、きつと現実と地獄さになつてゐる。

夢は時間や空間に縛られることがない。亡くなつた祖父と談笑することもあれば、エーゲ海を望みながらヨーグルトを味わうことだってできる。それに、場合によっては人を見殺しにすることだってあるだろう。そういう意味では、いかにも夢らしく矛盾に溢れた筋書きだつたららばどうして、こんな気分を目を覚ましたのか。そこにはリアリティがあつた。それはあまりにも色濃く迫り、全てを呑み込む渦のようだった。目覚めてからも持続する切迫感と恐怖、この嫌な汗が証拠だつて。

私の名前は、大宅主悦（おおやけちから）。市役所に入職して十年になる。そのうちの八年間は、まちづくりに関わる部署で働いてゐる。今朝の夢は、根っこ辺りで今の仕事ともつながつてゐる。『あなたのまちのディストピア』という映画を半は無理やりに見せられたような気分だ。

おそろしく。市役所に着いたら、真っ先に郵便局が見える窓に向かうだろう。そこから身を乗り出して駐車場を確認するにちがいない。大きな穴が空いていないかどうかわかる。

直径五十メートル以上はある。掘り出し物ではない。近づくほどますます深くなる。這いつくばつて下を覗き込んでも底が見えない。完全な闇とはこのことだ。ここには市役所の駐車場があつたはずだ。隣接している郵便局がそのまま残つてゐるのだから間違いない。それなのに、辺り一面はススキに覆われた草原と化し、その真ん中を型抜きで切り取られたように大きな穴が空いてゐる。

穴から二十メートルほど離れた位置に、裁判官が座る法壇が設置され、法壇の正面には証言台のようなものがある。そこですると、私が座つてゐる場所は傍聴席とこつたところか。高く伸びたススキが風に揺れる、墓場のような不気味な空間だ。

ふと見ると、穴の崖っぷちに一人のおばあさんが立つてゐる。穴の大きさと比較してみればアリンコほどに小さい。一歩踏み出せばものならぬ奈落の底へ音もなく消え去るだろう。（助けに行かないと）

そう思ったとき、証言台に一人の男性が立つてゐることに気が付いた。

「あなたは、あの孤立者の息子にあたるものか」

法壇の裁判官がゆつくりと問うた。五十年代後半くらいだろうか。落ちていたナイビーのブーツに身を包み、いかにもきはきはとした態度の女性だ。

「間違ひありません」と、その男が答えた。

「あの孤立者ももう間もななくて、あそこから飛び降りることになるが、手をつなぎ、彼女を支える覚悟はもつてゐるか」

女性の裁判官が尋ねた。

「手をつなぐ理由がございませぬ」

男はあっさりと返答し、その周りのススキが大きく揺れた。

「よつこい。最後に、手をつなぐ理由がないと考えるに至つた理由を聞かせてもらえますか」

裁判官は、いかにも回りくどい言い方で尋ねた。

「あの孤立者は、私が高校にあがる頃、見知らぬ男性と家を出ていきました。」

男はまたもや迷ふことなく答えた。おばあさんの方に目をやると、穴の底を覗き見るような姿勢で俯いてゐる。闇の中から風が吹いたのだろうか、ほどけた白髪が淋しげにゆれた。

（何か言い返してやれ）

そう思った。少なくとも高校生になるまで、彼を生み育ててきたのだろう。手をつないでもらう理由だつてあるはずだ。

「次の者、前へ」

裁判官が言った。淡々とした口調とは裏腹な笑顔がこちらを不安にさせる。おばあさんに目を向けている隙に、証言台に立つ者の数が増えている。しかし、先ほどの男の姿は見えない。その代わりに六十代から七十代くらいの男性二人と女性三人がそこに立つてゐる。

「あなた方は、あの孤立者の近隣に住まう者か」

裁判官が同じ調子で話しかけた。

証言台の五人組はいびつな輪をつくり、何やら相談してゐるようだ。どこか他人事のような態度からは、この場に居ることの白々しさが伺える。

「もう一度聞きます。あなた方は、あの孤立者の近隣に住まう者ですか」

しばらく経つてから、裁判官はもう一度尋ねた。

「確かに近くに住んでますよ。しかし、ゴミ出しの際に挨拶する程度の間柄ですが」

一人の男性が代表して、やや挑戦的な言い方で返答した。

「あの孤立者はもう間もななくて、あそこから飛び降りることになるが、手をつなぎ、彼女を支える覚悟はもつてゐるか」

やはり、同じ手順により裁判官が尋ねた。風に揺れないショートヘアは、彼女をAIだと錯覚させる。

「先ほども言いましたがね、たまに挨拶する程度の関係です。尋ねる先を再検討されてみてはどうか」

いびつな輪の中から、「筋違いなんだよ」と嘲笑を帯びた女が漏れてくる。

「では、手をつなぐ支える覚悟はないものと判断します。よつこいですね」

裁判官は早々と結論付けるように問うた。

「……」

耳を澄ましても返答は聞こえてこない。辺り一面に強い風が吹いて、ススキが海原のように波打つ。

「手をつなぐならい、やめてやれや」

私は傍聴席から野次を飛ばした。こんな正義感と思ひ切りを秘めていたのだろうか、自分自身が驚いてゐる。席から立つて、おばあさんのもとへ救世主の如く駆け出した。突然、分厚い何かにぶつかつてひっくり返つた。額を押さえながら前方を見ると、傍聴席はガラスのバリケードで囲まれて、これ以上進めない仕様になつてゐた。

「オオヤケさんは、孤立者や直接手をつなぐことはできません。基本的なルールです」

奇妙な笑みを浮かべながら、裁判官は言った。

バックナンバーはこちらから↓

